

# イスラーム・スンナ派における生殖補助医療への批判

—— カトリックと比較して ——

青 柳 か お る

## 序論

筆者は、イスラームの生命倫理の諸問題について、主にファトワー（一般信徒の質問に対する法学者の法的回答）を参照しながら、どのような議論が行われているのかを分析してきた。最近では、生殖補助医療（生殖補助医療技術：ART）<sup>1</sup>の問題を取り上げ、スンナ派の見解を明らかにしたり（青柳 2015）、またシーア派ではスンナ派よりも多様な解釈がみられることを論証してきた（青柳 2016; Aoyagi 2017）。以上の研究は、主に生殖補助医療を行うことを許可しているウラマー（‘ulamā’: 法学者）<sup>2</sup>の見解を分析したものである。本稿では、従来の筆者の研究では十分に議論することができなかった、生殖補助医療に批判的なスンナ派のウラマーの見解を取り上げたい。さらに、キリスト教のカトリックも生殖補助医療には主に反対の立場であるので、カトリックの議論もまとめた上で、スンナ派とカトリックの比較も行いたい。

第一章では、青柳 2015と重なる部分もあるが、アズハル機構<sup>3</sup>元総長のガード・アル=ハック（Jād al-Ḥaqq, 在任1982-96）のファトワーを中心に、生殖補助医療に条件付きで賛成している見解を述べる。第二章では、サウジアラビアの

<sup>1</sup> 生殖補助技術は assisted reproductive technology の略から ART と呼ばれている。ART とは「妊娠を成立させるためにヒト卵子と精子、あるいは胚を体外で取り扱うことを含むすべての治療あるいは方法」と定義されている。すなわち、人工授精、体外受精、顕微受精、配偶子提供、代理懐胎などすべての生殖医療が ART に含まれる（菅沼 2012, 2）。

<sup>2</sup> 知識（‘ilm）を持つ者（‘alim）の複数形がウラマー。法学のみならず、イスラーム諸学を修めた学者。

<sup>3</sup> アズハル・モスク、アズハル大学、法学者集団などを擁するスンナ派の宗教・教育組織。現代では実質的に宗教教育と宗教行政の役割を担い、エジプトの法体系や公教育制度の形成と密接に関係している。

ウラマーのファトワーを中心に引き上げ、とくに生殖補助医療に反対するファトワーに注目したい。第三章では、カトリックのバチカンの回教にみられる見解を引き上げ、最後にスンナ派とカトリックの反対理由について考察したい。

## 第一章 スンナ派における多数派の見解——ガード・アル=ハックを中心に

スンナ派の生殖補助医療に関する議論について、まず Rispler-Chaim 1993を参照しながら、明らかにしたい。

イスラーム法は、健康的で成功した結婚の基礎として、夫婦の多産と生殖能力の重要性を強調している。預言者ムハンマドは不妊の女性よりも、多産な女性との結婚を勧めている。女性だけではなく、男性についても不妊ではないことが勧められ、ハディースでは、不妊の男性がそれを女性に知らせずに結婚したことが非難されている。

もちろんイスラーム法では、結婚は生殖のための手段としてだけとみられているのではないし、夫婦の性的関係は生殖だけが目的ではないけれども、合法的な子どもをもうけることは、結婚の望ましい結果なのである<sup>4</sup>。イスラーム法は、子どもを出産するという方法以外に、子どもを手に入れる方法を認めていないので、養子は禁止されている。そのため、不妊のムスリムの夫婦が、人工受精に大きな関心を寄せるのは驚くべきことではない (Rispler-Chaim 1993, 19)。

アズハル機構元総長のガード・アル=ハックは、人工受胎（人工授精と体外受精）の可能性を、以下のように列挙している (*al-Fatāwā al-Islāmīyah*, Vol. 9, 3215)<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> 神が望まなければ、人工受胎（人工授精と体外受精）は成功しない。人工受胎は100%の成功率ではないし、避妊も同様である。すべての避妊が成功するわけではない、すべてのカップルが子どもをもうけられるわけでもない。期待と現実のギャップが、神の力を表している (Rispler-Chaim 1993, 21)。

<sup>5</sup> 1980年3月23日、エジプト・ファトワー庁から出されたファトワー (*al-Fatāwā al-Islāmīyah*, Vol. 9, 3213-3228)で、イスラーム世界で初めて体外受精について述べたものである。このファトワーの部分訳は、Rispler-Chaim 1993, 21-22; Inhorn 2003, 275-279参照。

- a. 婚姻期間中の夫婦が、夫の精子を人工的に妻に移す。
- b. 無精子または不妊の夫の場合、第三者の精子を、妻に移す。
- c. 夫の精子をほかの女性の卵子に受精させ、卵子を持たない妻の子宮に受精卵を移す。
- d. 妻の卵子と夫の精子を体外受精させて、1. 受精卵を妻の子宮に戻す。2. 受精卵を動物の子宮に入れた後、妻の子宮に戻す。

ガード・アル=ハックは、まずガザーリーの子孫を持つことの権利に関する文言を『法源学の精髓 (*al-Mustaṣfā min 'Ilm al-Uṣūl*)』より引用してから (*al-Fatāwā al-Islāmīyah*, Vol. 9, 3216)<sup>6</sup>、それぞれのケースを検討している。

a のケースは、女性の卵管がつまっているなど、妊娠の障壁がある場合で、夫婦とも生殖能力のある場合に用いられる。

b のケースは、不妊の夫と生殖能力のある妻の解決法である。精子バンクはこの問題を解決するために設立された。

c のケースは、排卵がないが、さもないと妊娠することのできる女性の解決法である。

d の1のケースは、試験管ベビーであり、子宮以外の場所で受胎し、子宮に戻されるものである。2のケースは、妊娠初期の段階で妻の胎内では耐えられない場合、ほかの子宮で育てられるというものである (Rispler-Chaim 1993, 21-22)。

夫の精子を妻に移すaのケースは、多くのムスリム法学者たちに認められている。しかし、この移植が結婚した夫婦の間だけでなければ、姦通 (*zinā*) となる。

次に、b (第三者の精子を、妻の子宮に移す) と c (夫の精子と妻以外の女性の卵子から作成した受精卵を、妻の子宮に移す) の場合は、イスラーム法では受け入れられない。というのは、婚姻契約と血縁関係を破ることになるからで

<sup>6</sup> シャリーアの意図は五つある。自分の信仰、自分自身、知性、子孫 (*nasl*)、財産を保持することであり、これら五つの基本を保持することは公共の福利である (*Mustaṣfā*, Vol. 1, 286-287)。このファトワーの中で、ガザーリーの文言が引用されていることは注目される。現代においてもコーラン、ハディースに次いで古典文献が参照されているということであり、たとえ人工受胎に関して古典文献に直接的な答えがなくても、なるべく古典に依拠して、子孫の保持について議論しようとするウラマーの姿勢が表れていると言えよう。

ある。さらに b の場合、妻は不妊の夫を軽蔑するようになる。そして家族は崩壊するだろう (Rispler-Chaim 1993, 24)。

d (夫婦が体外受精を行い、受精卵を妻の子宮に移す) の場合は、最近一般的な試験管ベビーの方法である。多くのムスリム法学者は、夫の精子と妻の卵子的の場合に限り、この技術を認めている。しかしそのほかの組み合わせは許されない (Rispler-Chaim 1993, 24)。

夫婦間の人工授精のみが許される理由は、その方法で生まれた子どもの地位への関心である。夫以外の種から生まれた子どもは非合法、姦通の子ども (walad zinā, 私生児) である<sup>7</sup>。その子は母親に属するが、父親には属さない。父親との関係が疑わしいからである。夫婦間の人工授精以外においては、夫は妻の姦通に合意したことになる。これはジャーヒリーヤ (前イスラーム) 時代の一般的慣習 (istibḍā'; 交換、夫以外の男性によって意図的に妊娠すること) である。しかしイスラーム法はこれを禁じている (Rispler-Chaim 1993, 25)。

また精子バンクを使用することも、姦通の偽装とみなされる。妻に、他人の男性の精子が授精されることを認める男性は、名誉を失い、イスラーム法では、脆弱とみなされる。妻が禁止された授精だと気づいていない場合、彼女は罰を受けないが、夫と医師はそうではない。禁止された授精を行った医者罪人であり、罰を科される (Rispler-Chaim 1993, 25)。

以上、スンナ派の人工受胎の議論を検討してきたが、人工授精であれ、体外受精であれ、夫婦間の精子と卵子を用いることが条件であった。第三者の配偶子を使用することは、姦通と同様であり、禁止されている。また体外受精の場合は、受精卵は妻の子宮に戻されなければならない。つまり、代理母は禁止である。ガード・アル＝ハックは、代理母禁止の理由などについてはほとんど述べていない。血縁関係の混乱と、姦通が理由だろうと思われる。代理母について、ほかのウラマーのファトワーをみてみよう。

イスラーム世界に大きな影響を及ぼしているエジプト出身、カタール在住のウラマー、カラダーウィー (Yūsuf al-Qaraḍāwī, 1926～) は『現代のファトワー

<sup>7</sup> 卵や精子を第三者から採取することは、誰かとベッドをともにすることに類似しており、それゆえ姦通に等しいとみなされる (Abu-Rabia 2013, 56)。

『*Fatāwā Mu‘āṣirah*』において、受精卵の代理母への移植について述べている。カラダーウィーは、夫以外の男性の精子と妻の卵子による体外受精は、血縁関係を混乱させ、また姦通になるとしている（*Fatāwā*, Vol. 1, 567）<sup>8</sup>。さらに母親とは産んだ者のことであり、代理受胎を依頼した妻はそれに反するとして（*Fatāwā*, Vol. 1, 570-571）、結論として、イスラーム法的には代理受胎に賛成できないとしている（*Fatāwā*, Vol. 1, 574）<sup>9</sup>。

もちろん、代理懐胎のみならず体外受精を禁止する立場もある。たとえば、アズハル機構元総長のアブド・アル＝ハリーム・マフムード（‘Abd al-Ḥalīm Maḥmūd, 在任1973-78）は、試験管内の授精を禁止した。彼は、この方法で生まれた子どもは、両親および感情を欠いているとする。また彼は、人口過剰な世界に試験管ベビーは不要であるとする。そして不妊の夫婦の抱える問題も考えずに、あらゆる試験管の授精を不適としている。1960年代の人口爆発の問題を解決する手段として、人口統計学の議論は、エジプトのあるサークルで一般的であった。それは政治体制の態度によって影響されていたのである（Rispler-Chaim 1993, 24）。

以上のように、ガード・アル＝ハックは、夫婦間であれば人工授精と体外受精を可としているが、第三者提供の配偶子は禁止している。そして出産するのは妻の場合に限られるため、代理母も禁止とされる。夫婦間の配偶子による受精卵という条件つきで、生殖補助医療は認められているのである。ただしアブド・アル＝ハリーム・マフムードのように、世界の人口が過剰であることなどを理由として、体外受精を禁止する者もいる。続いて、サウジアラビアのウラマーの見解を参照したい。

<sup>8</sup> またカラダーウィーは、『イスラームにおける合法と禁忌（*al-Ḥalāl wa-al-Ḥarām fī al-Islām*）』においてもドナー精子を禁止している。イスラームは姦通と養子を禁止することによって血縁を守っている。こうして外部からの要素が入ることなしに家族の血縁が明白に保たれる。これは、夫以外の精子による人工受胎を禁止するのと同様である。そして「これは姦通と同じカテゴリーの大罪である。夫以外の人工受胎と姦通は類似している」というアズハル機構元総長のマフムード・シャルトゥート（Maḥmūd Shaltūt）のファトワを引用している（*Ḥalāl*, 200; al-Qaradawi 1994, 227）。

<sup>9</sup> カラダーウィーは、ほかにも代理母の問題点を述べている。裕福な女性がこの方法を誤用する可能性もあるし、また女性が、短期間に多くの子どもを、得るために卵子を多くの借りた子宮に播種することも可能になるとする。カラダーウィーは、この問題は子宮の移植によって解決されるという（*Fatāwā*, Vol. 1, 573; Rispler-Chaim 1993, 22）。

## 第二章 スンナ派の批判的見解：サウジアラビアのウラマーを中心に

ファトワー提供ウェブサイト、Islam Q and A を参照し、主にサウジアラビアのウラマーの見解をみてみよう<sup>10</sup>。賛成意見と反対意見の両方がみられたが、反対意見を中心に紹介したい。「体外受精の規則」というファトワーは、以下の通りである。このファトワーの回答者は不明であるが、自分の見解と、ほかのウラマーの見解の両方を列挙している<sup>11</sup>。

質問：コーランとスンナ（預言者ムハンマドの慣行・範例）では、体外受精は許されますか？

回答：子どものできない夫婦は、忍耐し、神の褒美を求め、そして許しの祈願をすべきである。神は理由があってものごとを決定していることを理解すべきである。ムスリムは、魔術などの間違った方法に注意し、また神を恐れない金銭目的の医師にも注意すべきである。というのは、卵子、精子を入れ替えてしまう医師もいるからである。このため、これらの方法を禁止したり、厳しい条件をつける法学者がいるのである。

ここでは、医師が卵子と精子を取り違えるなどの間違いが起きる可能性があるため、体外受精は禁止とされ、医師の人為的ミスの可能性を危惧している。

ファトワーは以下のように続く。：シャリーア（イスラーム法）の規則では、これ（体外受精）は安全性の面から許されない。これは、シャイフ・アブドゥッラー・イブン・ジブリー（Shaykh ‘Abd Allāh ibn ‘Abd al-Rahmān ibn Jibrīn, 1933-2009）の見解であり、「試験管ベビーの規則」で引用しておいた<sup>12</sup>。

もしくは体外受精は、以下のような条件のもとでは許容されるかもしれない。

1. 喫緊の状況であること。
2. 女性のスタッフがいる場合、妻は男性に恥部を見せてはならない。

<sup>10</sup> 本稿のウェブの引用は、すべて2018年1月25日最終閲覧。

<sup>11</sup> <https://islamqa.info/en/98604>

<sup>12</sup> <https://islamqa.info/en/1992> サウジアラビアの「科学研究とファトワー布告および宣教・宗務監督委員会（The Standing Committee for Scientific Research and Ifta, Da‘wah and Guidance）」によれば、試験管ベビーは許されない。というのは、それは女性の恥部をさらし、私的な箇所を触ることになる。たとえ夫の精子を使ったとしても。私の意見では、人々は神の決まりを受け入れるべきである。「また御望みの者を不妊になされる（コーラン42章50節）。」

3. 夫は自慰行為によって精子を射精してはならない。
4. 卵子と精子は、後で使用するために冷凍保存してはならず、ただちに受精卵を子宮に入れなくてはならない。さもないとほかの人の配偶子と混ぜられたり、ほかの人に移植されてしまう可能性がある。
5. 夫の精子と妻の卵子による受精卵を妻の子宮に移植しなくてはならない。
6. 信頼できる医師のもとで行われること。

以上の条件に、体外受精で問題となる点が集約されていると言えよう。

さらに「体外受精の規則」のファトワーは以下のように続く。: シヤイフ・イブン・サーリフ・アル=ウサイミーン (Shaykh ibn Ṣāliḥ al-ʿUthaymīn, 1925-2001) は、体外受精について質問されたとき、以下のように答えた。

- a. 必要がないなら、許されないと我々は考える。体外受精は、卵子を取り出す手術を伴い、恥部を見せなければならなくなる。また卵管を傷つけたり、感染したりする恐れがある。さらに、神が創造なさったように自然に任せたほうが、神に対する適切な作法であり、そのほうが、最初はよくても後で失敗するかもしれない人間の発明した方法（体外受精）よりも、よりよいだろう。
- b. もし必要があるなら、以下の三つの条件が整えば、体外受精は間違っていないと考える。

1. 夫の精子で受精すること。他人の精子は許されない<sup>13</sup>。
2. 精子を許された方法で集めること。妻と戯れることによって射精すること。
3. 受精後、卵子は妻の子宮に移植すること。ほかの女性に移植することは許されない<sup>14</sup>。

このように、イブン・サーリフ・アル=ウサイミーンは、必要がなければ体外受精は行うべきではないとし、理由として、体外受精は自然な方法ではない

<sup>13</sup> 「またアッラーはあなたがたのために、あなたがたの間から配偶者を定め、配偶者からあなたがたのために子女や孫を与えられる。また良いものを与えられる。それでもかれらは虚偽を信仰して、アッラーの恩恵を拒否するのか（コーラン16章22節）」が引用されている。

<sup>14</sup> 「妻はあなたがたの耕地である。だから意のままに耕地に赴け。だが自分の魂のために、（予め何か）善いことをしなさい。アッラーを畏れなさい。あなたがたは（来世で）かれに会うことを知りなさい。なお（これらの）吉報を信者たちに伝えなさい（コーラン2章223節）」が引用されている。



ことなどを挙げている。しかしながら彼は、夫婦間の配偶子による受精卵を用いることなど、三つの条件付きで体外受精を認めている。

ただし、イブン・サーリフ・アル=ウサイミーンは以下のように慎重な意見を述べている。

人工授精においては、夫の精子は注射器によって妻の子宮に移植される。これは深刻な問題である。医師が、妻以外の女性の子宮に移植しないと誰が確信できるだろう？注意が必要であり、我々は、夫婦と医師を知っている特定のケースでなければ、ファトワーを発するべきではないだろう。これは軽々しく考えるべき問題ではなく、もし虚偽が起きれば、血縁関係が混ざり、シャリーアが禁止する混乱が生じてしまうのである。預言者ムハンマドいわく、「妊娠中の女性とは、彼女が出産するまで交渉してはならない。」そのため、私は夫婦と医師を知っている場合でなければ、ファトワーを発しないのである。

このように、イブン・サーリフ・アル=ウサイミーンは夫婦間の配偶子に限って体外受精を認めつつも、配偶子の取り違えなどの医療ミスを危惧しており、夫婦と医師をよく知っている場合にしかファトワーを出せないとして、生殖補助医療には慎重な姿勢であると言えよう。

次に、「ラマダーン月<sup>15</sup>に人工授精を行おうとする夫婦」という質疑応答（回答者不明）によれば、以下の通りである<sup>16</sup>。

質問：私たちは排卵サイクルを理由として、ラマダーン月に人工授精を行う予定です。私たちは、清浄な状態になく、ラマダーン月の禁欲を破ることになります。神は我々を許してくださるでしょうか。

回答1：人工授精は、多くの過ちを含んでいる。故意に精子を入れ替えてしまう医師もいる。彼らが悪人だからか、または夫の精子は受精に適さないことを確信しているか、金銭欲が彼らにそうさせるのだろう。多くの病院ではミスが起こっており、サンプル（精子）が入れ替えられている。法学者たちのこのことに対する見解は厳しく、もしサンプルが保存され、後で妻の子宮に移植される場合、これは許されないと彼らは言う。また、それ（人工授精）はまった

<sup>15</sup> ラマダーン月の日中には斎戒が義務とされ、食事のほかにも性交渉などが禁止されている。

<sup>16</sup> <https://islamqa.info/en/49727>



く許されないと言う法学者もいる。この方法に内在する、血縁関係の混乱とそのほかの害悪へと導く危険性のために。

まず質問者は、人工授精を身体関係はなくとも性行為とみなしており、ラマダーン月の人工授精はシャリーアに反することになるのではないかと質問しているのである。回答では、精子の取り違えが起きる可能性があることから、許されないとされている。もし他人の精子が注入された場合、夫以外の子どもが生まれ、血縁関係が混乱してしまうからである。この質疑にはもう一つの回答がある。

回答2：この人工授精は必要なケースではない。夫婦は禁欲を破ることになる。夜か、ラマダーン月の後に手術を行うべきである。アドバイスとしては、忍耐し、神の定めを受け入れ、子孫をつくるために合法な方法を用いることである。もし人工授精を行うと主張するなら、サンプルを注視し、信頼できる女性医師によって、すぐに妻の子宮に入れることを確認することである。そして緊急ではないのだから、ラマダーン月は避けなさい。

回答2においては、精子を取り出したら、ただちに妻の子宮に入れることを条件に、ラマダーン月を避ければ人工授精は許可されると言われている。これは取り違えが生じることを危惧しているからであろう。しかし、実際の医療現場では女性の排卵のタイミングなどに合わせて受精する必要があるだろうから、ただちに受精させることは困難なのではないだろうか。この質疑応答においても、精子の取り違えという医療ミスが、生殖補助医療に反対する大きな理由であると言える。

サウジアラビア最高法官、「科学研究とファトワー布告および宣教・宗務監督委員会」総局長などを歴任したイブン・バーズ（‘Abd al-‘Azīz ibn ‘Abd Allāh ibn Bāz, 1912-1999）<sup>17</sup>も生殖補助医療に反対するファトワーを発している<sup>18</sup>。

質問：私の妻は四人の子どもを持っていますが、これ以上の子どもが持てず、医師によると人工授精をする必要があるそうです。この手術は私の近所の病院

<sup>17</sup> イブン・バーズ（ビンバーズ）について詳しくは、森 2008参照。

<sup>18</sup> <http://www.alifta.com/Fatawa/fatawacoeval.aspx?language=en&View=Page&HajjEntryID=0&HajjEntryName=&RamadanEntryID=0&RamadanEntryName=&NodeID=4690&PageID=4114&SectionID=14&SubjectPageTitlesID=26821&MarkIndex=0&0#Artificialinsemination>

では行われておらずジェッダに行かないといけません。妻は手術を拒否しています。この規則はどうなっていますか？

回答：人工授精は、現代のウラマーの中には、ある条件下では、神の定めた限界<sup>19</sup>を破らない限り認める者もいる。しかし、私はやはりこの点については決心しかねており、それはしないことを勧める。というのは、これは際限のない悪への扉を開くだろうからである。もし彼女がこれ以上の子どもを持つことができなくても、あなたはすでに四人の子供がいる。またあなたはもっと子どもがほしければ、二番目、三番目、四番目の妻と結婚することもできる。それゆえ、この手術は行わないほうがよい。

イブン・バーズも生殖補助医療に反対しているが、理由については「際限のない悪への扉を開く」とされており、具体的には書かれていない。おそらくほかのウラマーと同様、配偶子の取り違いや恥部を医師に見せること、また次々と子どもがほしくなること、さらにドナー卵子や代理出産を考えるようになることなどが理由なのではないだろうか。

最後に、「子宮を貸すことの禁止」という質疑応答をみてみよう<sup>20</sup>。

質問：臨月まで妊娠を保つことのできない女性もいます。夫婦の受精卵を代理母の子宮に移植することは許されますか。また報酬は必要ですか、不要ですか。

回答：イブン・ジブリーンは以下のように答えている。

1) これ（代理出産・代理懐胎）は逸脱であり、非難される。近年、人々にとって代理出産という概念が魅力的になってきており、彼らは、それは間違っていないと言う。しかし疑いなく、これはハラーム（禁止）である。神が貞節を守れと命じているからである。「自分の陰部を守る者。ただし配偶と、かれらの右手に所有する者（奴隷）は、別である。かれらに関しては、咎められることはない（コーラン23章5-6節）。」神は妻以外との性交渉を禁じている。

ここでは、姦通が問題とされ、代理母が禁止されている。つまり、夫の精子が妻以外の女性の子宮に注入されるか、もしくは受精卵が入れられることが、

<sup>19</sup> シャリーアの刑法であるハッド刑、この場合は姦通罪を指すと思われる。

<sup>20</sup> <https://islamqa.info/en/22126>

身体関係がないとしても、姦通に当たると考えられているのである。姦通は、シャリーアでは厳しく禁止されている。

2) 人間は、神から血縁関係と子孫を守るよう命じられている。代理出産は、血縁関係の混乱と、父親と母親が誰なのかという問題を引き起こす。血縁関係の混乱は、妻と代理母との論争を引き起こす。さらに、これは恥部を見せることになってしまうし、精子と卵子を採取し、他人の子宮に移植することにもなる。これらすべてはシャリーアによって禁じられている。「男の信者たちに言うてやるがいい。〔自分の係累以外の婦人に対しては〕かれらの視線を低くし、貞潔を守れ。」(コーラン24章30節)」

ここでは、血縁関係の混乱と、代理母が母親なのか、妻が母親なのかという問題が生じるため、代理出産が禁止とされている。また代理出産は、男性医師に女性の恥部を見せることになるということも禁止理由とされている。

一方、アズハル大学のアブド・アル=アズィーム・アル=マトアニー(‘Abd al-‘Azīm al-Maṭ‘anī, 1931-2008)は、以下のように、夫の精子を妻ではない代理母の子宮に入れることが最大の禁止理由であるとする。

貸し腹は、物質文明であり、道徳的な価値に重きを置かない西洋文明の革新のひとつである。遺伝的性質に影響するとか、血縁関係を混乱させると言うことが問題なのではない。それはシャリーアの規則ではないのだ。遺伝的性質に影響しようが、血縁関係を混乱させようが、問題ではない。というのは、この逸脱を禁止するシャリーアの規則は、ほかのことに依拠しているからだ。それは、子宮は女性の私的な箇所であり、私的な箇所は、婚姻契約によらなければ許されないからである。だから子宮はその女性と結婚した夫だけのものである。誰も無関係な妊娠のためにそれを利用することはできない。もし子宮を貸した女性が未婚であれば、彼女は見知らぬ男性に子宮を許したことになる。彼女と彼はお互いに許されないのである。これは完全な姦通ではないとしても、やはり完全にハラームである。夫以外の男性の精子を彼女の子宮に入れることになるのだから。

このように、血縁関係ではなく、疑似姦通を理由に代理母を禁止する法学者もいる。

以上、さまざまな理由によって生殖補助医療に反対するスンナ派ウラマーの

見解をみてきた。

### 第三章 カトリックにおける生殖補助医療の議論

カトリック教会の教えでは、不妊に悩む夫婦にとって福音とも思える人工的な受胎はいけないことになっている（松本 1998a, 37）<sup>21</sup>。ここでは、主に松本 1998a, 38-41 および松本 1998b を参照しながら、カトリックにおける生殖補助医療について明らかにしたい<sup>22</sup>。

キリスト教社会では、長い歴史を通して、人は、「結婚」した「一夫一婦」のカップルの「性的関係」の結果生まれるのが当然で、他のケースは非倫理的なものとして捉えられてきた。ところが現在、「結婚していない」女性から生まれたり、「一夫多妻」の環境の中で生まれたり、人工的受胎（人工授精・体外受精等）にみられるように「性的関係なし」に生まれたりしているケースがある。これらのケースは、非倫理的と断罪すべきことだろうか。カトリック教会の観点から、「夫婦間での性的関係なしの受胎」および「結婚外の性的関係による受胎」について考えたい。この問題は、結局、「人間」「結婚」「性」「夫婦」「親」「子」等をどのようなものとして捉えているかにかかってくる<sup>23</sup>。

人工授精について、教会は1897年に許されないと回答している。その後、1949年に、教皇ピオ12世が「人工授精を行う場合に、道徳的な面や法的な面を考えずに単に、そして主として生物学や医学の立場からだけ、取り扱ってはならない」と述べている。さらに結婚していない者の人工授精および結婚している夫

<sup>21</sup> カトリックの権威と多くのカトリックの神学者、そして少数のユダヤ教の権威は、夫婦間の受精卵を妻の子宮に入れるものも含めて、すべての体外受精に反対している。カトリックが反対する理由は三点にまとめられる。第一に、体外受精は生殖への不適当なアプローチである。第二に、それは夫婦間の性交渉と子どもをもうけることを切り離すことになる。第三に、その手続きは生まれてくる子どもにとって不当である。さらに、体外受精には受精卵の死がつきまとうし、精子はカトリックで禁止されている自慰行為によって通常は入手される（Mackler 2003, 157）。『生命のはじまりに関する教書（*Donum Vitae*）』は、非配偶者間の体外受精のみならず、配偶者間のそれも否定している（Mackler 2003, 158）。

<sup>22</sup> さらに、松本信愛氏のウェブサイト「人の誕生をめぐる倫理」にも、生命倫理の諸問題におけるカトリックの特徴に関する資料が記載されており、参考にした。  
http://www2u.biglobe.ne.jp/~shinai/ronbun-frame.html

<sup>23</sup> http://www2u.biglobe.ne.jp/~shinai/ronbun-frame.html

婦が夫以外の精子を使って子どもを得ようとする人工授精も厳しく排斥している。子どもを欲しいという、それ自体では正当な夫婦の望みも、この望みを実現するために人工授精を正当化する十分な理由にはならないというのである。さらに1961年には、ヨハネ23世が回勅において、間接的に人工授精をとがめている（松本 1998b, 54-56）<sup>24</sup>。

しかし医学界はそういう事には無関係に進んでおり、このような状況の中で、必要に迫られたバチカンの教皇庁教理省が1987年に『生命のはじまりに関する教書』<sup>25</sup>を発表したのである。それによると、「受精が合法的に行われるのは、それが「子どもをもうけるために本来ふさわしい夫婦の営み」の結果であるときである。……これに対して、夫婦の営みの結果として求められるのではないような生殖のあり方は、倫理的観点から見れば、本来の完全性を失ったものといわなければならない（教皇庁教理庁1996, 47-48）」という。「夫婦の性行為における一体化と生殖、およびその成果としての愛の表現と親になるということの間の密接なつながりの根拠は、人間が肉体と靈魂を備えたものであるということにある（教皇庁教理庁1996, 48）。」すなわち「夫婦が互いに自分を与え合う表現としての性行為において、肉体的な側面と精神的な側面を切り離すことはできない（教皇庁教理庁1996, 48）」ということである<sup>26</sup>。

非配偶者間の人工受精について『生命のはじまりに関する教書』は、「人間の誕生が、夫婦の間の愛の行為の実りとしてもたらされるべきであり（教皇庁教理庁1996, 50）」、「子どもは、結婚している両親によって受精され、この世に生まれ、育てられる権利を有する（教皇庁教理庁1996, 42）」と結論づけている。ここから、「非配偶者間の人工受精は結婚の絆に反し、夫婦の尊厳に反し、親の持つ特別の使命に反する。さらにそれは、結婚によって結ばれた夫婦から自分

<sup>24</sup> 世界で初めてイギリスで体外受精児が誕生したのは1978年であるが、それよりも22年も前の1956年に、ピオ12世は、試験管内で人間の生命の誕生を試みることは不道徳であり、まったく許されないものであると述べている（松本 1998b, 56）。

<sup>25</sup> 夫婦間での性的関係なしの受精について、カトリック教会は、歴代教皇や、公会議、教皇庁教理省等がいろいろな形で触れているが、それらをまとめた形で1987年に教皇庁教理省より『生命のはじまりに関する教書』として発表された。翻訳は、教皇庁教理庁1996参照。

<sup>26</sup> 人工授精や体外受精は、肉体的・精神的なつながりがないままに行われると考えられるため、カトリックでは認められないと言えよう。

が受胎され、生まれるという子どもの権利にも反する。……第三者の精液や卵子を用いることは、夫婦の絆の侵害であり、結婚の本質的な特徴としての夫婦の一体性を損なうものである（教皇庁教理庁1996, 43）」として、非配偶者間の人工受胎は、人工授精、体外受精にかかわらず、教会としては容認することができないと結論づけている。

配偶者間の人工受胎に関しても同教書は否定的であるが、非配偶者間のときは少しトーンが異なる。体外受精はたとえ配偶者間のものであっても「人間の生殖は客観的にみて、その完全性を失っており、人間の生殖に本来特有な尊厳が侵されている（教皇庁教理庁1996, 52）」ので、倫理的には認められないとしている。「配偶者間の体外受精は、非配偶者間のそれと比べればそれほど倫理的に否定的な面を持っているわけではない（教皇庁教理庁1996, 52）」ということを確認ながらも、「結婚の二つの成果と人間の尊厳に関する従来の教えに従って、教会は今も、配偶者間の体外受精に対して倫理的立場から反対する。このような受胎のあり方は、たとえ受精卵の死を避けるためにあらゆる注意が払われたとしても、その方法自体が不法であり夫婦の一体性と生殖の尊厳に反する（教皇庁教理庁1996, 52）」と結論付けている（松本 1998a, 38-39）。

そして配偶者間の人工授精に関して同教書は次のように述べている。「配偶者間の人工授精は認められない。ただし、その方法が夫婦の行為の代替としてではなく、夫婦行為の自然な目的の達成を助けるために用いられる場合には別である（教皇庁教理庁1996, 52）。」すなわち、技術的手段が、夫婦の行為を助けるかまたはその自然な目的を助けるためのもの<sup>27</sup>であれば倫理的に問題はないが、その方法が夫婦行為を代行して行われるものならば、子どもをもうけるためにふさわしい夫婦の営みにならないというわけである。

同教書は「どんな医師や生物学者も、科学者としての資格があるからといって、人の生命のはじまりやその運命について決定する権利を持っているわけではない（教皇庁教理庁1996, 51）」としている。教会は「目的は手段を正当化しない」という倫理感をとっているのです、目的や結果がよいということでその手

---

<sup>27</sup> 妊娠を助ける技術、すなわち精液の状態を改善するための投薬や、女性の排卵を促進し受精しやすくさせる排卵誘発剤の利用を指すと考えられる。



段を不問にするわけにはいかないのである（松本 1993a, 40-41）。

このように教会は、「人間の誕生は夫婦行為の実りとしてもたらされるべきである（教皇庁教理庁1996, 42）」ということをかなりはっきりと主張している<sup>28</sup>。とはいえ、「不妊症に悩む夫婦を支え助けるのは、教会の役割である」とも言い、科学者たちが「不妊の夫婦が自分たちと子ども両方の尊厳を十分に尊重しながら子どもをもうけることが出来るよう研究を続けていくこと」に期待を表明している（教皇庁教理庁1996, 51）<sup>29</sup>。

以上のように、カトリックでは、人工授精と体外受精（配偶者間および非配偶者間）は、肉体的・精神的一体性を伴わないものであるため、その方法自体が不法であり、夫婦の一体性と生殖の尊厳に反するとして認められていない。人工授精と体外受精が認められていない以上、受精卵を代理母に移す代理受胎についても、当然のことながら認められないのである。

## 結論

まず、イスラームの議論をまとめたい。イスラームでは、結婚と家族生活に大きな重要性を置いているので、生殖補助医療について、おおむね反対はない（Abu-Rabia 2013, 56）。ただし、スンナ派のウラマーによれば、婚姻継続中の夫婦間の人工授精、および夫婦間の精子と卵子から受精卵を作成し、妻の子宮に入れる場合のみ、生殖補助医療は許可される。つまり非配偶者間の精子と卵子を用いることや、代理母の子宮で妊娠を代行することは不可ということである。しかしながら、少数派の見解として、生殖補助医療そのものが認められないとするウラマーも存在する。

サウジアラビアのウラマーに特徴的なのかどうかは明確ではないが、本稿で

---

<sup>28</sup> バチカンがたとえ配偶者間のものであっても人工授精や体外受精による妊娠に反対するのは、それが結婚における夫婦の一体化と生殖を切り離しているからである。この教えは『生命のはじまりに関する教書』の中で形を変えて何度も繰り返されている（松本 1998b, 63-65）。ただし本文で述べたように、配偶者間の体外受精は認められないが、人工授精については、夫婦行為の代替手段とならない場合に限り認められる。

<sup>29</sup> <http://www2u.biglobe.ne.jp/~shinai/ronbun-frame.html>



は主にサウジアラビアのウラマーのファトワーから、生殖補助医療への反対意見を分析した。その結果、たとえ夫婦間であっても、1) 配偶子の取り違い（人工授精の場合は精子の取り違い、体外受精の場合は精子と卵子両方の取り違い）という医療ミスが起きる可能性があり、それが血縁関係の混乱につながること、2) 女性から卵子を採卵したり、精子を注入したりする際、男性医師に恥部を見せることになることが反対の理由であった。しかし2)の理由は、自然妊娠の際の健診や出産の際にも、女性医師がいなければ男性医師が女性の恥部を見ることになるのだから、説得力は弱いのではないだろうか。

さらに代理懐胎禁止の理由についても、血縁関係の混乱が挙げられているが、それよりも夫以外の精子が女性の子宮に入ることが最大の問題だとする見解もあり、姦通という問題はイスラームにおいて非常に重要であることが分かる。

一方、キリスト教のカトリックにおいて、人工授精および体外受精（配偶者間、非配偶者間ともに）による人工受胎は認められていない。配偶者間の人工授精は、夫婦の行為を助けるという範囲内での技術であれば容認されている。しかし、肉体と精神が結びついた夫婦の営みを伴わない体外受精は認められていない。目的は手段を正当化しないという原則のもと、カトリックは夫婦の営みによる子どもの誕生が重視されており、それを伴わない人工的な技術には否定的である。その点では、カトリックはイスラームよりも、夫婦の営みと生殖が切り離せないと考えられていると言えるだろう。

またカトリックでは、生殖補助医療に反対する理由として、精子と卵子の取り違いによる血縁関係の混乱や、男性医師が女性の恥部を見ることになるといった議論はみられなかった。カトリックでは、子どもを持つためには、配偶者間の性交渉だけが許される方法であるということが生殖補助医療に反対する最大の理由であるが、スンナ派の反対派では、そのことはほとんど理由として挙げられていなかった。しかしながらスンナ派の反対派においても、イブン・サーリフ・アル＝ウサイミンが「自然に任せたほうが、神に対する適切な作法である（本稿、7）」と述べているように、配偶者間であっても生殖補助医療に反対する理由の根底には、カトリックと同様に、夫婦間の性交渉のみが子どもをもうけるための正しい道だとする考え方があるのではないだろうか。

\* 本稿は、平成27～29年度科学研究費補助金（基盤研究(C) 課題番号15K02056）、平成28～29年度科学研究費補助金（基盤研究(B) 課題番号16H03538）による研究成果の一部である。

## 参考文献

### アラビア語文献

- Fatāwā*: Yūsuf al-Qaraḏāwī, *Fatāwā Mu‘āṣirah*, 3 vols., Kuwait: Dār al-Qalam li-al-Nashr wa-al-Tawzī‘, Vol. 1, 2005.
- al-Fatāwā al-Islāmīyah*: Dār Ifṭā’ al-Miṣrīyah, *al-Fatāwā al-Islāmīyah min Dār Ifṭā’ al-Miṣrīyah*, Vol. 9, Cairo, 1997.
- Ḥalāl*: Yūsuf al-Qaraḏāwī, *al-Ḥalāl wa-al-Ḥarām fī al-Islām*, Cairo: Maktabah Wahbah, 2004.
- Iḥyā’*: al-Ghazālī, *Iḥyā’ ‘Ulūm al-Dīn*, ed. by Abū Ḥafṣ, 5 vols., Cairo: Dār al-Ḥadīth, 1992.
- Mustaṣfā*, al-Ghazālī, *al-Mustaṣfā min ‘Ilm al-Uṣūl*, 2 vols., Beirut: Dār al-‘Ulūm al-Ḥadīthah, n.d.

### 英語文献

- Abu-Rabia, Aref. 2013. “Infertility and Surrogacy in Islamic Society: Socio-Cultural, Psychological, Ethical, and Religious Dilemmas,” *The Open Psychology Journal*, 6, 54-60.
- Aoyagi, Kaoru 2011. “A Comparative Study of Marriage in Islamic Thought: Al-Ghazālī and al-Qaraḏāwī,” T. Kurihara ed., *Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte*, Niigata: Niigata University, 29-53.
- Aoyagi, Kaoru 2014. “Early Embryos in Islamic Bioethics: A Comparative Study with Judaism and Christianity concerning Contraception, Abortion, and Embryonic Stem Cells,” Yohei Kondo ed., *The Proceedings of the Middle East and Islamic Seminar, April 2013-March 2014: Thought and Societies in the Middle East*, Tokyo: The University of Tokyo Centre for Middle Eastern Studies (UTCMES), 3-20.
- Aoyagi, Kaoru 2017. “Assisted Reproductive Technologies in Islam with Special Reference to Twelver Shia,” *Studies in Humanities* (『人文科学研究』), vol. 141, 1-20.
- Atighetchi, Dariusch 2007. *Islamic Bioethics: Problems and Perspectives*, [Dordrecht]: Springer.

- Hammad, Ahmad Zaki (translation review) 1999. *The Lawful and the Prohibited in Islam*, Plainfield, Indiana: American Trust Publications.
- Inhorn, Marcia 2003. *Local Babies and Global Science: Gender, Religion and In Vitro Fertilization in Egypt*, New York: Routledge.
- Inhorn, M. and S. Tremayne eds. 2012. *Islam and Assisted Reproductive Technologies: Sunni and Shia Perspectives: Fertility, Reproduction and Sexuality*, New York, Oxford: Berghahn Books.
- Mackler, Aaron L. 2003. *Introduction to Jewish and Catholic Bioethics: A Comparative Analysis*, Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Mahmud, Farouk 2012. "Controversies in Islamic Evaluation of Assisted Reproductive Technologies," in Inhorn, M. and S. Tremayne eds. 2012.
- Omran, Abdel Rahim 1992. *Family Planning in the Legacy of Islam*, London: Loutledge.
- al-Qaradawi, Yusuf 1994. *The Lawful and the Prohibited in Islam: Al-Halal Wal Haram Fil Islam*, Plainfield: American Trust Publications.
- Rispler-Chaim, Vardit 1993. *Islamic Medical Ethics in the Twentieth Century*, Leiden: E.J. Brill.
- Sachedina, Abdul Aziz 2009. *Islamic Biomedical Ethics: Principles and Application*, Oxford: Oxford University Press.
- Serour, G.I. 1993. "Bioethics in Artificial Reproduction in the Muslim World," *Bioethics*, Vol. 7, No. 2-3, 207-217.
- 日本語文献
- 青柳かおる2015. 「生殖補助医療に関するスンナ派イスラームの生命倫理」『比較宗教思想研究』第15輯, 19-41.
- 青柳かおる2016. 「イスラームにおける生殖補助医療——シーア派を中心に」塩尻和子編『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』明石書店, 186-207.
- 青柳かおる 2017. 「イスラームにおける婚姻制度の諸相——スンナ派のミスヤール婚とウルフイー婚, シーア派の一時婚 (ムトア婚)」『比較宗教思想研究』第17輯, 1-21.
- 教皇庁教理庁 (ホアン・マシア・馬場真光訳) 1996. 『生命のはじまりに関する教書——人間の生命のはじまりに対する尊重と生殖過程の尊厳に関する現代のいくつかの疑問に答えて』カトリック中央協議会.
- 菅沼信彦 2012. 「生殖補助医療の現状と展望」シリーズ生命倫理学編集委員会編『生殖医療』丸善出版社, 1-23.

玉井真理子・大谷いづみ編 2011.『はじめて出会う生命倫理』有斐閣.

松本信愛 1998a.『いのちの福音と教育——キリスト教的生命倫理のヒント』サンパウロ.

松本信愛 1998b.「人工授精および体外受精に関するバチカンの見解」『サピエンチア——英知大学論叢』第22号, 53-68.

三田了一（訳） 1983.『日亜対訳・注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会.

森伸生 2008.「サウジアラビア最高法官ビンバーズ師の果たした役割」『シャリーア研究』5, 45-53.

ヨハネ・パウロ二世（裏辻洋二訳） 2008.『回勅 いのちの福音』カトリック中央協議会, ペトロ文庫.